

《論 説》

近代交通網の形成にともなう地域の盛衰

——岡山県邑久郡牛窓地方の場合——

神 立 春 樹

- 1 本稿の課題
- 2 物産移出入の推移からみた牛窓の位置
- 3 物産移出入の推移からみた牛窓の性格
- 4 物産の流通と産業の動向
- 5 牛窓の盛衰

1 本稿の課題

本稿は、これまでに筆者がすすめてきている「日本資本主義の成立・展開と地域編成」という課題追究の多くの素材を求めてきている岡山県についての検討の⁽¹⁾一環として、近代交通網の形成にともなう地域の動向を、その対象事例として最もふさわしい地域のひとつと思われる邑久郡牛窓地方を対象として検討しようとするものである。

鉄道網=近代交通網の形成が商品流通ルートにおける大きな変化をもたらし、産業の盛衰に多大な影響をもたらすことは、いうまでもないことである

(1) 筆者のこれまでのこのような観点からの岡山県近代産業史に関するものに、本学会誌の第12巻第1号、第2号、第4号、第13巻第1号、第2号、第4号、第14巻3・4号、第15巻第2号、『研究報告書第14集岡山県の産業構造』(岡山大学産業経営研究会)、同前第16集、『地方史研究』173号、掲載のものがある。

う。筆者は「戦前期岡山県物産県外移出入状況」なる小論⁽²⁾において、日本資本主義確立過程における岡山県産業構造の形成とそれにとまなう地域編成を物産移出入＝商品流通から検討したが、そこでは、物産移出入部門別状況は岡山県産業構造とその推移を反映していること、物産移出入地域別状況は鉄道網の形成と工業の発展にとまなう地域編成を示すものであろうことを記述してきた。本稿は、そこにおいて述べてきたところの地域編成の進行を特定の地域について検討しようというものである。

ここでまず既存の文献によって岡山県における近代交通網の形成を概観し、牛窓町の位置づけを行ないたい。⁽³⁾

まず、近代交通網の形成以前の状況であるが、今日の岡山県域の交通体系は、陸上交通、海上交通、河川交通からなっていた。まず陸上交通についてみよう。陸上交通は県南を東西に貫く山陽道と県北を同じくほぼ東西に貫く出雲街道（往来）、この二つを主脈として成っていた。山陽道が五街道につぐ重要幹線路であったことはいうまでもない。県南とは地理的に隔絶されている県北美作地方を貫く出雲往来は畿内への直行ルートで、山陰を近畿に結びつける重要な交通路であった。この二つの主脈とこれから派生する、そしてこの2大主脈を結びつける支道が陸上交通体系をなしていた。第二の往古からの西国を中央と結びつけ、大陸との往来の手段となってきた海上交通は、江戸時代には「西廻り航路」の開発以来、塩飽船・北前船が活躍し、瀬戸内海は西日本の物産輸送の大動脈となった。岡山県沿岸部でも牛窓、大多府、下津井などの港町が繁栄をきわめたのである。第三の河川交通は、美作地方、あるいは備中北部地方を備前、備中南部と結びつけるものであって、東から

(2) 『岡山大学経済学会雑誌』第13巻第2号、1981年、所収。

(3) 以下の岡山県における近代交通網の形成については、石田寛監修『岡山県の地理』1978年、福武書店「Ⅷ交通」（西川忠男執筆）313～315ページによる。視覚的にはその四つの図を参照されたい。なお、岡山県の交通に関するものとしては、同書も依拠している藤沢晋『岡山県の交通』1972年、日本文教出版株式会社、がある。

吉井川、旭川、高梁川の3大河川を利用しての高瀬船交通である。県北の物産はこの高瀬船交通によって県南に搬出され、また県南等からの物産が搬入されていた。

近代に先立つ時点での交通体系は以上のごとくであったが、明治以後、鉄道網の形成にともない、鉄道を軸とした近代交通体系ができる⁽⁴⁾。明治24(1891)年の山陽鉄道の開通が陸上交通、海上交通に決定的な影響を与えた。さらに明治31年の中国鉄道岡山・津山(今日の津山口)間の開通、明治37年の中国鉄道岡山・総社間の開通、明治43年国鉄宇野線岡山・宇野間の開通、大正2(1913)年の井笠鉄道笠岡・井原間、同年三幡鉄道桜橋・三幡間の開通、大正3年西大寺鉄道西大寺・森下間の開通、大正12年の下津井鉄道茶屋町・下津井間の開通、同年の作備鉄道津山・美作追分間の開通、同年の片上鉄道片上・井ノ口間の開通というように次々と開設された。山陽鉄道を軸とするこのような鉄道網の形成によって旧来の陸上、海上、河川交通は衰退していくのである。

このように山陽鉄道をその中軸として形成された鉄道網にあって、その他の多くの鉄道路線のなかで宇野線の開通が、この山陽鉄道をあたらしい海上交通と結合させるものとして重要な意味をもっている。本州(近畿)と西国間の連結は、伝統的には阪神～阿波路であるが、宇野線の開通によって、山陽線・宇野線を経て、宇野・高松航路となる。これによって人物の往来もさることながら、物産の主要な流通路となるのである。この宇野港はさらには昭和4年には第二種重要港湾、5年には国際貿易港に指定され、たんに四国との玄関口であるだけでなく、外国貿易の一拠点ともなり、商品流通の重要地となるのである。

以上はこの岡山県における近代交通網の概観であるが、牛窓町は海上交通

(4) 以下、鉄道の開通状況については、鉄道省『鉄道停車場一覽』(昭和2年版)鉄道教育会、によった。

の要地であったところであり、そして今日にいたるまでも鉄道が開通しなかったところである。交通体系の再編のなかで、いわば離脱していったところといえよう。ここにはかつて誇っていた繁栄から停滞へという動向が予想されるのであるが、この点の検討を以下行なっていきたい。

2 物産移出入の推移からみた牛窓の位置

海上交通の要地であった牛窓は、船舶の出入、人物の往来、物産の出入荷をもって繁栄していたところであったろう。『明治13年岡山県統計表』の「港湾」の項は、岡山県下の港湾15をとりあげ、これらについていくつかの事項を記載している。第1表はそれを示すものである。物貨の出入は玉島が最大で912,666.410円、ついで下津井が568,454.600円、そしてこの牛窓は480,000.000円で第3位である。商船出入は日比港が最大で55,611、ついで牛窓が第2位

第1表 明治初期岡山県の港湾の状況

(明治13年)

港 湾	商 船		定 繋 船	物		貨	
	出	入		出	入	合 計	比 率
				円 厘	円 厘	円 厘	%
大多府港(和気郡)	70	5,475	18	176.500	29.000	205.500	0.01
片上港(〃)	92	187	75	17,300.000	9,220.000	26,520.000	0.80
牛窓港(邑久郡)	1,097	21,600	250	80,000.000	400,000.000	480,000.000	14.4
旭港(〃)	—	10,500	—	20,000.000	100,000.000	120,000.000	3.6
下津井港(児島郡)	6,000	6,000	68	139,880.000	428,654.000	568,534.000	17.1
田之口港(〃)	710	715	34	18,591.382	93,622.333	112,213.715	3.4
日比港(〃)	27,200	28,411	59	17,083.900	10,562.900	27,646.800	0.83
下村港(〃)	530	850	25	38,240.445	148,250.000	186,490.445	5.6
八浜港(〃)	100	80	15	50,000.000	65,000.000	115,000.000	3.5
小串港(〃)	400	500	20	15,000.000	20,000.000	35,000.000	1.1
玉島港(浅口郡)	1,186	1,460	104	60,489.952	852,176.458	912,666.410	27.4
寄島港(〃)	131	119	18	4,580.000	158,060.000	162,640.000	4.9
連島港(〃)	605	670	25	423,000.000	11,000.000	434,000.000	13.1
羽口港(〃)	350	250	5	20,000.000	10,000.000	30,000.000	0.90
笠岡港(小田郡)	85	82	18	41,976.000	72,500.000	114,476.000	3.4
合 計	38,556	76,899	734	946,318.179	2,379,074.691	3,325,382.870	100.0

註1) 『明治13年岡山県統計表』より作成。

で22,697となっている。定繋船は250で、2位の玉島港の104をはるかにうわまわる。このように明治13年の段階では岡山県下有数の物産の出入荷地であったこの牛窓の物産集散地としての地位の推移を検討していきたい。

明治22年に総額9,478,707円であった岡山県物産県外移出入額は、明治27年21,313,512円、32年48,797,652円、37年79,388,626円、42年71,668,153円、大正3年118,755,407円、8年465,215,686円、13年383,389,903円、昭和4年401,081,646円、9年415,330,042円となる。このような推移を示す岡山県物産県外移出入の部門別構成の推移と地域別構成の推移についてはすでに前掲論文において検討してきており、ここでは省略するが、本稿とのかかわりあい以後者、すなわち地域別状況について概略ふれておきたい。

第2表はこの物産県外移出入の地域別構成の推移を示すものである。明治22年の最大の地域は岡山市でこれが28.8%を占める。ついで浅口郡が26.4%、上道郡が23.9%で、以下児島郡8.5%、小田郡7.8%、都窪郡2.2%、邑久郡1.6%、和気郡0.58%となる。この明治22年を始点としたその後の推移にみられる特徴をあげてみよう。第一は、物産県外移出入のある郡市数が増加していることである。明治22年には8郡市であったが、32年には13郡市、42年には20郡市というようにである。当初は備前と備中南部地方に限られていたが、32年には美作のいくつかの郡があらわれ、さらに42年には全県にひろがっている。この郡市別移出入額は、移出入荷個所の移出入額をその属する郡市別に集計したものであるが、このような郡市数の増加はこの移出入荷個所の増加の結果としてあらわれているのである。このような地域的なひろがりが見られたのである。第二は、それにもかかわらず少数の郡市への集中が再びみられるということである。明治22年には79.1%であった上位3郡市の全県中の比率は、32年には72.0%、42年には54.8%というように小さくなる。しかし大正8年はそれは58.0%で、やや増加し、さらに昭和4年には69.0%と再び大きくなっている。上位2郡市についても同様にいえよう。さらに最上位1郡市についてみると、明治22年は28.8%であったものが、32年には33.5%

第2表 物産県外出入地域別構成の推移

	明治22年	明治32年	明治42年	大正8年	昭和4年
岡山市	28.8 %	33.5 %	21.8 %	25.3 %	20.7 %
御津郡	—	—	0.35	0.35	0.41
赤磐郡	—	0.51	1.1	0.82	0.79
和気郡	0.58	1.2	1.9	6.4	4.3
邑久郡	1.6	0.94	3.2	1.9	0.65
上道郡	23.9	4.0	5.0	3.1	1.6
児島郡	8.5	7.6	8.5	16.3	35.8
都窪郡	2.2	9.0	10.7	12.6	5.8
浅口郡	26.4	27.2	22.3	16.4	12.5
小田郡	7.8	11.3	6.4	5.4	7.3
後月郡	—	—	1.4	1.2	2.7
吉備郡	—	0.62	2.7	0.86	0.91
上房郡	—	—	1.2	0.89	1.8
川上郡	—	—	0.14	0.09	0.29
阿哲郡	—	—	0.10	0.31	—
真庭郡	—	0.28	0.67	0.46	1.9
苫田郡	—	3.6	5.4	3.3	1.8
勝田郡	—	—	0.02	0.09	0.01
英田郡	—	0.37	0.46	0.40	—
久米郡	—	—	7.1	3.8	0.69
全県	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

註1) 各年度の『岡山県統計書』、ただし明治22年は『第12回岡山県勸業年報』より作成。

に増大した後、42年22.3%と小さくなるが、大正8年には25.3%に増大した後、昭和4年には実に35.8%に達しているのである。第三は、この上位郡市は大きく変化していることである。当初は岡山市を最大とし、浅口郡、上道郡が岡山市と大きな懸隔なく、上位を占めていたが、明治32年には上道郡がわずかに4.0%へと一挙に小さくなってしまい、第3位は小田郡となる。岡山市、浅口郡はその後も上位3郡市に入っているが、しかしこの間の明治42年、大正8年間に児島郡が8.5%から16.3%へと一挙に増大し、さらに昭和4年には35.8%を占めるにいたっているのである。岡山市、浅口郡が一貫して上位

を占めながら、そのウェイトを小さくしていること、上道郡の著しい低落、そして児島郡の著しい上昇がみられたのである。第四は、以上の第二と第三の結果であるが、明治42年には比較的に全県にひろがっていたものが再び特定の地域のウェイトがたかまってきたことである。二つの郡が移出入額が0となり、美作は明治42年には13.7%であったものが、昭和4年には4.4%となり、備前東部3郡は6.2%から5.7%となっている。このようにいくつかの地域が物産県外移出入地としての地位を低下させているのである。

以上のごとき特徴がみられるが、これらの諸点は、なによりもこの期間における交通体系の形成と展開に起因するのである。明治22年は備前・備中の南部地域の主として港津が物産移出入地であったが、上述の第一の特徴は、この間の山陽鉄道の開通に大きくよっている。山陽鉄道の開通により、沿線鉄道駅が出入荷地となる反面、鉄道を忌避した上道郡西大寺の出入荷地としての地位の凋落によって上道郡が低下しているのである。明治42年には、32年にはまだその影響が明確には反映されていない31年開通の中国鉄道岡山・津山間、37年開通の同岡山・総社間が加わった段階での状況を示し、さらに大正8年には明治43年の国鉄宇野線、大正2年の井笠鉄道等が加わった段階での状況とこの宇野線が加わった変化を反映しているものといえよう。この点は、例えば中国鉄道津山駅（現在の津山駅）の所在した久米郡が7.1%を占め、それに接続する苫田郡が5.4%となっていることに端的に示される。山陽鉄道、中国鉄道、それに国鉄宇野線の開通によるこれら鉄道駅が物産県外移出入地となることによって、物産移出入は全県的に地域的に拡大されたものとなっているのである。そして同時に国鉄宇野線の開通とそれに接合する宇野港の物産県外移出入の拠点化によって、児島郡の地位の急速なたかまりがみられたのである。大正8年と昭和4年間にはさらにいくつかの鉄道路線が開通し、岡山県下の鉄道網は完成したにもかかわらず、この間にみられた物産県外移出入の特定地域への集中化傾向はまさしくこの国鉄宇野線とそれに接合する宇野港という宇野への収斂にもとづくものともいえる。近代鉄道

網の形成による物産県外移出入にみられる商品流通ルートの再編成はここに終了したといえるのである。

以上はこの岡山県の物産県外移出入の地域的構成の推移をみたのであるが、牛窓町が瀬戸内海に面する海上輸送の拠点であったところであるので、物産県外移出入統計とは別個の商港出入荷統計によって再度全県的な動向を検討しておきたい。明治42年度以降の『岡山県統計書』には「商港輸出入総額」という商港ごとの出入荷統計がある。明治42年には39～41年のものもあるので、明治39年以降の状況がわかる。第3表はこの商港出入荷統計を郡別に集計したものである。当初出入荷額が最も大きいのは浅口郡で26.4%、ついで児島郡25.3%、邑久郡15.6%、上道郡13.1%等となる。42年には児島郡が最大で30.4%、浅口郡は28.2%、邑久郡は14.6%であるが、上道郡はわずか4.9%へと低落している。この海上輸送においても明治42年から大正8年にかけての期間に児島郡が一挙にその比率を大きくし、他方上道郡が明治39年から42年間に急速にその比率を縮小しているのである。児島郡には多くの商港があり、当初は日比港が最大で下津井港、小串港、田ノ口港がそれにつぐものであったが、この年にはこの児島郡のわずか3.7%にすぎなかった宇野港が大

第3表 郡別商港出入荷額の推移

	明治 39 年		明治 42 年		大 正 8 年		昭 和 4 年	
	商港数	移出入額	商港数	移出入額	商港数	移出入額	商港数	移出入額
御津郡	1	9.1 %	1	9.3 %	1	2.8 %	1	0.36%
和気郡	3	4.7	3	6.2	3	13.8	3	5.9
邑久郡	4	15.6	4	14.6	4	3.7	4	1.9
上道郡	3	13.1	3	4.9	3	3.6	3	3.1
児島郡	12	25.3	12	30.4	12	64.0	14	63.0
浅口郡	4	26.4	4	28.2	4	8.4	3	17.5
小田郡	8	5.6	8	6.5	9	3.6	7	8.3
全 県	35	100.0 27,846,443	35	100.0 25,492,835	36	100.0 186,124,387	35	100.0 201,934,127

註 1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

2) 全県の下段は実額(単位円)。

正8年には48.4%、昭和4年には74.7%となっていて、児島郡のウェイトのたかまりはまさしくこのような宇野港のそれによるのである。この宇野港は国鉄宇野線の開通にともない、宇野駅と接合する港湾として装いをあらたに登場してきたものであり、鉄道輸送と連結する近代交通体系の一環としてのそれなのである。

以上の物産県外移出入郡市別構成の推移において、牛窓の属する邑久郡は、明治22年1.6%、32年0.94%、42年3.2%、大正8年1.9%、昭和4年0.65%というように、そのウェイトはたかくなく、明治42年をピークとして低下し、昭和4年には1%にもはるかにみえないところとなっていっていった。もうひとつの商港統計においても、明治39年には15.6%、42年には14.6%であったものが、大正8年には3.7%、昭和4年には1.9%へとそのウェイトは大きく低下しているのがあった。このように邑久郡の物産流通上のウェイトはもともととりたててたかかったというわけではないが、それにしてもそれが決定的に低下したのは明治42年から大正8年の間である。この間に近代鉄道網とそれに結合する近代海上運輸が形成されているのであり、以上のごとき低落はまさしく近代交通網の形成に起因するものといえよう。このような趨勢をたどる邑久郡の物産流通上の拠点となっていたのが牛窓町であった。以下、この牛窓町の物産県外移出入の推移、商港出入荷の推移をみていこう。

まず、物産県外移出入であるが、明治22年から昭和9年までの各年の移出入額は第4表のようである。明治22年に147,441円であった移出入額は、その後ジグザグをたどりながら増大し、明治35年には150万円台、38年には280万円台、そして明治40年には3,670,201円に達する。翌41年から減少にむかい大正3年の447,921円にいたる。その後再び増大にむかい、6年に100万円台、そして8年には6,830,542円というピークに達する。翌9年はまた大きく減少し、10年にはわずかに12万円台に落ち込む。その後ジグザグをたどりながら増加するが200万円台に達するのは昭和5年で、10年には2,810,840円となるが、大正8年のピーク時にははるかに及ばない。

第4表 牛窓町物産県外移出入額の推移

	移 出 額	移 入 額	移 出 入 額	全県中の比率		移 出 額	移 入 額	移 出 入 額	全県中の比率
	円	円	円	%		円	円	円	%
明治22年	72,501	74,940	147,441	1.6	大正3年	121,616	326,305	447,921	0.34
23	87,351	64,885	152,236	1.5	4	243,764	308,264	552,028	0.48
24	68,889	60,284	129,173	0.93	5	277,235	302,815	580,050	0.30
25	6	435,160	594,235	1,029,395	0.38
26	7	389,804	1,157,215	1,547,019	0.37
27	8	4,359,477	2,471,065	6,830,542	1.5
28	384,478	378,735	722,213	4.2	9	1,092,545	1,810,575	2,903,120	0.58
29	10	944,070	1,651,620	128,928	0.03
30	424,978	309,230	734,208	1.5	11	638,965	358,624	997,589	0.30
31	255,070	348,150	603,220	1.0	12	673,543	416,325	1,089,868	0.35
32	174,100	284,250	458,350	0.94	13	710,562	546,148	1,256,710	0.33
33	360,940	263,300	624,240	1.1	14	697,600	637,425	1,335,025	0.31
34	昭和1年	674,072	588,009	1,262,081	0.31
35	739,000	834,030	1,573,030	2.1	2	567,536	490,358	1,057,894	0.24
36	908,350	943,600	1,851,950	2.6	3	776,437	820,412	1,596,849	0.40
37	1,050,800	1,036,900	2,087,700	2.6	4	856,883	1,116,680	1,973,563	0.49
38	1,581,520	1,255,550	2,837,070	3.3	5	948,856	1,144,580	2,087,436	0.61
39	1,581,520	1,255,550	2,837,070	2.7	6	1,108,116	1,029,428	2,137,544	0.67
40	1,761,036	1,374,115	3,670,201	4.1	7	1,157,678	1,257,102	2,414,780	0.75
41	1,181,600	988,200	2,169,800	2.4	8	1,277,959	1,364,682	2,642,641	0.77
42	1,912,115	1,769,790	2,081,905	2.9	9	1,454,688	1,288,561	2,743,249	0.66
43	829,800	844,900	1,674,900	2.0	10	1,437,543	1,373,297	2,810,840	0.57
44	865,500	893,100	1,758,600	1.9					
大正1年	544,380	456,900	1,001,280	0.96					
2	493,700	416,050	909,750	0.62					

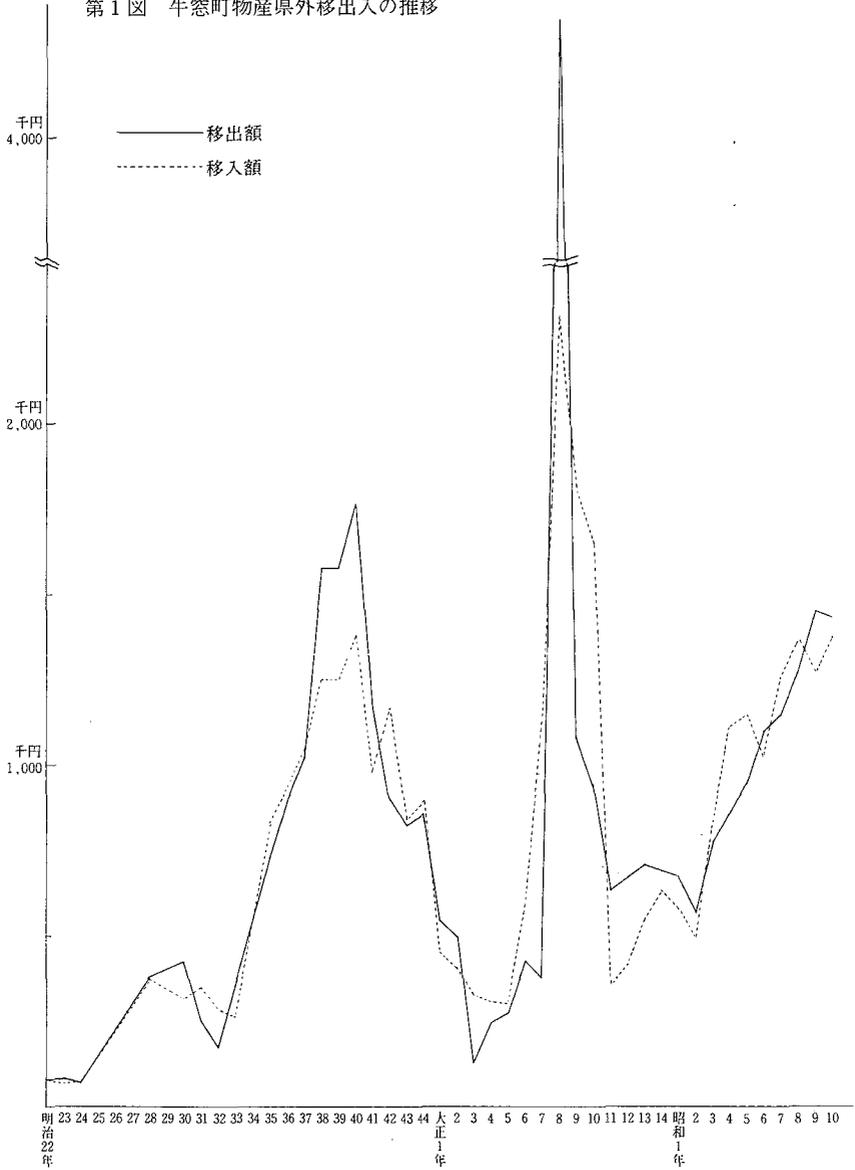
註1) 各年度の『岡山県統計書』より、但し、明治22年から32年は各年度の『岡山県動業年報』または『岡山県農商工年報』より作成。

第1図はこの牛窓町の物産県外移出入額を移出額、移入額別に示すものである。移出額と移入額はほぼ均衡している年が多く、二つのピーク時、明治40年と大正8年が移出が移入を大きくうわまわっている年となっている。ところで岡山県についてはすでに前掲拙稿で図示したが、それと比較すると、大正8年が最大のピークとなっていることが共通しているが、牛窓町の場合には明治40年がもうひとつのピークをなしていることが全県と著しく異なるものとなっている。また大正8年のピーク時あとの落ち込みが著しいこともこれまた牛窓町の特徴となっている。この牛窓町の全県中に占める比率をみると、明治22年は1.6%で、20年代は1%未満もあるとはいえ28年の4.2%を除いて1%台、30年代は同じく1%未満もあるが前半は1%台、後半は2~3%台、そして40年代は40年の4.1%、41~44年は44年の1.9%のほかは2%台である。大正期以後は大正8年が1.5%であるのを除いて、他はいずれも1%未満である。

以上、牛窓町の物産県外移出入額の推移をみてきたが、牛窓町のそれは明治40年と大正8年を二つのピークとするもので、大正8年が最大であるとはいえ、全県的な動向と比較するとき、明治40年代のたかさにこそ最大の特徴があるといえる。全県中の比率も最大ともいえる時期であり、この時期をさかいに、物産移出入地としての地位は急速に低下しているといえるであろう。大正8年のたかさよりも明治40年のそれこそ注目すべきであろう。

つぎに商港移出入統計によってこの牛窓町の推移をみておこう(第5表)。明治39年に全県合計27,846,743円の商港移出入額るとき、牛窓港は3,521,715円で全県中の12.6%を占めている。こころみに、他の主要な商港の占める比率をみると、西大寺港6.4%、下津井港5.8%、玉島港23.6%、笠岡港4.1%となっている。宇野港はわずかに0.93%にすぎない。玉島港は抜群な大きさであるが、牛窓港も大きい。この牛窓港は、40年は3,576,770円と増大するが比率は12.0%とややさがり、以後絶対額が減少するなかで、その比率は減少し、明治44年には7.3%、大正4年には1.5%、5年は絶対額はやや増加するが比

第1図 牛窓町物産県外移出入の推移



註1) 第4表より作成.

第5表 牛窓港移出入額及び主要商港移出入額比率

	牛窓港移入額			主要港灣の占める比率					
	移出額	移入額	移出入額	牛窓港	西大寺港	下津井港	宇野港	玉島港	笠岡港
明治39年	1,560,843	1,960,372	3,521,715	12.6%	6.4%	5.8%	0.93%	23.6%	4.1%
40	1,491,035	2,085,735	3,576,770	12.0	4.4	4.5	0.61	22.5	6.8
41	1,033,021	1,427,805	2,460,826	9.4	6.7	1.3	1.4	31.6	1.8
42	1,004,675	1,367,670	2,372,345	9.3	4.6	2.0	1.4	24.6	4.2
43	955,000	1,124,910	1,979,910	7.0	4.1	1.6	1.8	31.1	4.4
44	968,700	1,218,210	2,186,910	7.3	4.7	0.94	4.0	29.2	4.0
大正1年	729,713	773,480	1,503,193	4.4	5.4	0.93	8.0	27.0	3.7
2	686,547	724,430	1,410,977	3.6	7.7	1.1	14.9	22.9	2.7
3	468,329	425,150	893,479	2.4	5.0	1.3	8.3	20.6	4.4
4	454,582	428,384	882,966	1.5	2.3	0.47	10.7	18.0	6.6
5	451,740	461,545	913,285	1.0	1.6	0.66	12.6	10.3	8.2
6	829,656	676,476	1,506,132	1.3	2.1	0.53	20.5	11.6	1.4
7	2,059,719	1,345,057	3,404,776	3.1	2.3	0.73	85.3	10.3	1.7
8	2,743,816	2,134,127	4,877,943	2.6	3.2	0.72	20.9	7.6	2.1
9	2,162,396	1,415,025	3,577,421	1.9	2.7	0.67	3.1	4.6	1.6
10	2,024,330	1,229,690	6,831,441	5.5	3.0	1.0	16.2	8.7	1.8
11	781,164	813,435	1,594,599	1.2	2.6	1.0	14.4	10.4	1.7
12	788,720	886,689	1,675,409	1.5	2.7	0.12	21.6	14.3	3.3
13	988,147	930,773	1,918,920	1.2	1.9	0.86	44.8	12.6	2.2
14	1,244,528	1,053,583	2,298,111	1.3	1.7	0.83	48.9	11.7	2.7
昭和1年	969,225	1,043,912	2,013,137	1.2	2.2	1.7	47.6	13.9	2.4
2	852,504	800,224	1,652,728	1.0	2.3	1.6	51.4	13.2	2.7
3	1,265,495	1,219,352	2,484,847	1.2	2.6	1.3	45.8	17.1	5.4
4	1,579,319	1,326,552	2,905,871	1.4	2.5	1.4	47.1	16.8	5.5
5	1,673,216	1,367,719	3,040,935	1.6	1.8	1.5	50.4	18.7	7.7
6	1,589,919	1,460,105	3,150,024	1.8	2.1	0.66	48.3	18.7	8.6
7	2,014,644	1,558,735	3,573,379	2.0	2.2	0.79	43.0	18.6	10.3
8	2,091,753	1,555,084	3,646,821	1.9	2.0	0.54	42.4	16.3	10.1
9	2,121,924	1,755,805	3,877,729	1.4	3.6	0.18	32.8	14.6	10.0
10	1,940,908	2,004,127	3,945,035	1.1	0.85	0.18	32.6	14.7	7.6

註 1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

率は1.0%と減少していく。大正8年は2.6%であるが、他の主要商港をみると、西大寺港3.2%、下津井港0.72%、玉島港7.6%、笠岡港2.1%というようにいずれも減少しているなかで、ひとり宇野港のみが20.9%となっている。宇野港は13年には44.8%、昭和4年には47.0%とさらに増大している。この商港移出入統計は明治38年以前についてはないために、39年にいたる状況はあきらかでないが、明治40年頃がピークであったように思われるのである。本節冒頭でみた明治13年段階では、牛窓港は物貨の出入額は県下諸港中第5位、その占める比率は14.4%であったものが、明治39年にもなお12.6%を占めていた。物産輸送が海上輸送から鉄道輸送へと大きく転換しているとはいえ、なお無視し得ない海上輸送にあって、牛窓港はなお一定の地位を保っていたのである。明治40年頃、あるいはそれにいたる時期は物産移出入の拠点として活況を呈していたのである。

3 物産移出入の推移からみた牛窓の性格

この牛窓町の物産集散地としての性格を、物産県外移出入の部門別構成の特徴などから検討していく。

まず岡山全县の物産県外移出入の部門別構成であるが、これについてはすでに前掲拙稿で検討してあるので、ここでは要点のみを記しておく。明治42年の岡山県の物産県外移出額は35,985,358円、同移入額は35,682,795円であるが、移出入の部門別構成はつぎのようになる。移出の最大は普通農産物でこれが全体の29.6%を占め、ついで糸類及綿類が26.9%で、以下、編物及其原料9.7%、織物及同製品8.7%、其他雑品8.6%、金属及同製品4.9%、飲食物4.3%、肥料2.9%、水産物2.8%、油類及燃料1.7%となる。他方、移入の最大は糸類及綿類が28.1%を占め、ついで其他雑品20.7%、普通農産物11.6%、肥料11.5%で、以下、織物及其製品9.9%、油類及燃料6.7%、飲食物4.9%、水産物4.5%、金属及同製品1.8%、編物及其原料0.2%となる。普通農産物は移入も大きいが移出では最大であって全体としては大きく移出超過であ

る。その中心は米であって、これだけで移出の25.4%に達する（移入では8.7%）。糸類及綿類は大きな移出があるが、それをうわまわる移入があることにより、この部門は移入超過となっている。移出の中心は綿糸であり、これだけで29.1%を占めるというように大きく、これに生糸が加わる。移入は繰綿が圧倒的で、これが実に全移入の24.1%を占めており、これに綿糸3.3%が加わる。移出が以上の普通農産物につぐ編物及其原料は、移入はきわめて少なく、この部門は大きく移出超過である。その中心は花菱、麦稈及経木真田、萱表である。織物及同製品は移出も少なくないが移入がそれをうわまわる。絹布及同製品が移入され、綿布及同製品に移出が多い。肥料は人造肥料の移出があるが、他方で魚肥、大豆粕、人造肥料が大量に移入されている。油類及燃料は石油石炭を主とした大量の移入がある。飲食物、水産物も移入が移出をうわまわるが、砂糖、塩干魚が入る。金属及同製品は移出が移入をわずかにうわまわるが、それは銅の移出が大きいことによる。この部門は普通農産物、編物及其原料とともに移出超過部門となっている。以上、部門別にみてきたが、つぎのように概括できるであろう。移入品には普通農産物、織物及其製品、飲食物、水産物、其他雑品等のように県民の消費品もあるが、最大の移入品である繰綿をはじめ各種肥料、石油、石炭等の農業ならびに工業の原材料品が大きなウェイトを占めている。他方、移出品は最大の米、それにつぐ綿糸のほかは、生糸、綿布及同製品、花菱・麦稈及経木真田・萱表等の編物及原料、銅である。以上が物産県外移出入部門別構成上の特徴である。ところで、この岡山県は戦前期を通じて、農工構成比でみると農業のウェイトが相対的にたかい農業県としてとどまったところであり、また工業内部にあつては繊維産業のウェイトのたかい、そして生産財生産部門の展開の微弱なところであつた。いま後者の工業内部の構成を同じく明治42年についてみ⁽⁵⁾ると、生産額でみて全国が染織49.7%、機械器具8.0%、化学14.5%、飲食物

(5) 『明治42年工場統計表』による。

18.5%、雑8.0%、特別1.3%のとき、岡山県はそれぞれ69.2%、0.5%、11.3%、9.0%、7.1%、2.9%となっていて染織のウェイトがきわめてたかく、機械器具の展開がみられないという構成上の特徴がみられるのである。約7割を占める染織は製糸、織物は小さく、紡績だけで51.9%となる。また雑工業は生産額では全国を下まわるが、工場数では40.7%、職工数では20.3%という全国の15.9%、10.0%に比して2倍の大きさであることが注目されようが、この雑工業の中心は菫蕈、麦稈及経木真田である。すなわちこの年の岡山県は大規模紡績工場が屹立し、それが工業の基幹をなし、織物、製糸、それに化学中の窯業の展開、菫蕈、麦稈真田等の雑工業の広汎な存在があった。後年になると織物業における工場工業化がすすみ、また縫製業の展開がみられるなどして、繊維産業、雑工業のウェイトの一貫したたかさがみられるのである。先にみた物産県外移出入の部門別構成は、まさしくこのような岡山県の産業構成の特徴を反映したものである。

ところでこの同じ明治42年の牛窓港の物産県外移出入は、移出額1,169,700円、移入額912,115円で、全県と同じように前者が後者をややうまわるとはいえ、ほぼ均衡している。部門別構成をみよう(第6表)。移出は其他雑品が最大で37.4%を占め、ついで水産物29.3%、普通農産物21.7%で、以下、飲食物5.1%、油類及燃料4.7%、織物及同製品1.5%、編物及其原料0.34%となる。他方、移入は其他雑品が最大で実に50.6%を占め、ついで普通農産物14.2%、水産物12.9%で、以下、油類及燃料8.0%、飲食物5.5%、織物及同製品2.9%、金属及同製品2.6%、肥料1.5%、綿糸及綿類1.5%、編物及其原料0.36%となる。この牛窓町の物産移出入部門別構成は全県のそれと大きく異なっているが、その最も著しいことは、全県では移入では最大の、そして移出でも最大に僅少差でそれにつぐ、いずれも全体の30%に近い糸類及綿類が、移入においてわずか1.5%という小さき、其他雑品が移出の37.4%、移入の50.6%という著しい大ききでいずれも最大であること、移出・移入ともに4%台であった水産物が移出は29.3%で、其他雑品につぐ第2位の大きき、移入も12.9%を占

第6表 牛窓物産県外移出入部門別品目別構成。

	明治22年		28年		32年		37年		40年		42年		大正1年		6年		8年			
	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入	移出 移入	出 入		
普通 農 産 物	米	6.5 14.0	10.3	20.1 19.0	19.6	31.0 12.8	19.7	18.1 16.2	17.2	11.0 9.7	10.3	8.4 10.1	9.1	16.1 2.4	9.9	10.8 —	4.5	7.6 0.22	4.9	
	麦	3.0 0.20	1.6	5.0 1.2	3.1	8.6 —	3.3	6.9 4.3	5.6	6.4 2.6	4.4	5.9 2.7	4.5	19.3 —	10.5	6.3 —	2.6	0.55 0.36	0.48	
	大豆	— 0.32	0.16																	
	小豆	— 0.12	0.06																	
	雑穀、其他穀類			6.5 3.9	5.2	— 1.4	0.87	4.8 4.8	4.8	3.7 3.3	3.5	4.3 0.25	2.5	— 1.2	0.56	0.16 1.8	1.1	— 0.50	0.18	
	果実					— 9.9	6.1	— 2.9	1.4	0.16 0.82	0.51	1.9 0.62	2.7	0.09 1.2	0.60	6.3 0.38	2.9	0.02 0.12	0.06	
	野菜類					12.6 2.2	6.2	5.5 1.9	3.7	0.39 0.17	0.28	1.2 0.47	0.88	2.2 —	1.2			3.5 —	2.2	
	小計	9.5 14.7	12.1	31.7 24.1	27.9	52.3 26.2	36.1	35.4 30.2	32.8	21.6 16.6	19.0	21.7 14.2	18.4	37.7 4.8	22.7	23.4 2.1	11.1	11.7 1.2	7.9	
	水 産 物	生魚	22.1 2.9	12.3	6.1 4.0	5.0	16.1 1.8	7.2	12.4 2.4	7.4	9.8 3.8	6.7	19.9 8.1	14.7	0.92 —	0.50	— 0.34	0.19	1.1 2.6	1.6
		塩干魚	8.4 3.5	5.9	9.6 9.1	9.4	6.9 8.8	8.1	2.4 2.4	2.4	2.5 2.5	2.5	3.1 3.7	3.3	— 1.3	0.58	— 0.45	0.25		
乾物		0.41 0.67	0.54			6.9 7.7	7.4													
鱈節		2.8 4.5	3.7																	
貝類							1.4 0.09	0.77	0.94 0.37	0.64	1.0 0.20	0.66								
海藻						— 2.4	1.2	— 0.63	0.33	1.7 0.88	1.3	— 0.22	0.10							
食塩		3.3 —	1.6	1.2 —	0.59	4.1 —	1.6	0.47 —	0.24			3.6 —	2.0	28.3 —	15.4	20.2 —	8.5	2.9 0.41	2.0	
其他									3.3 2.3	2.8										
小計		37.0 11.6	24.1	16.9 13.1	2.6	34.0 18.3	24.3	16.7 7.3	12.0	16.5 9.6	12.9	29.3 12.9	22.1	29.2 1.5	16.1	20.2 0.78	9.0	4.0 3.0	3.6	
飲 食 物		酒	0.53 —	0.26	2.7 0.32	1.5	4.3 —	1.6	0.72 0.77	0.75	1.4 0.79	1.1	4.4 1.5	3.2	2.8 —	1.5	0.80 —	0.34	1.4 —	0.88
	洋酒						— 0.28	0.14	— 0.26	0.13	0.69 0.43	0.22	— 0.07	0.03	— 0.10	0.06				
	醬油	0.39 0.92	0.56	0.55 0.08	0.31	2.1 —	0.78	0.57 0.34	0.46	0.58 0.39	0.48	— 0.82	0.75	0.33 —	0.18	0.30 —	0.13	0.18 —	0.12	
	酢	— 0.13	0.01																	
	製茶	— 0.01	0.00				— 0.19	0.10	— 1.5	0.08	— 0.33	0.14								
	砂糖	0.68 1.6	1.1	— 1.6	0.79	— 3.8	2.4	— 3.3	1.6	0.79 —	0.41	0.39	0.17	— 1.3	0.60	— 0.09	0.05	— 0.48	0.18	
	素麵						— 0.24	0.12	— 0.17	0.09	— 1.9	0.82	— 0.04	0.02	— 0.06	0.04	— 0.03	0.01		
	糴詰						2.4 —	1.2	— 0.01	0.05	— 0.04	0.02	— 0.07	0.03						
	其他								0.74 0.56	0.64				— 0.92	0.42					
	小計	1.6 2.5	2.0	3.3 2.0	2.6	6.4 3.8	4.8	3.7 5.1	4.4	2.7 3.1	3.0	5.1 5.5	5.3	3.1 2.4	2.8	1.10 0.25	0.61	1.6 0.51	1.2	

(第6表つづき)

	明治22年		28年		32年		37年		40年		42年		大正1年		6年		8年						
	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入	移出	移入					
織物及同製品	絹布及同製品						1.9	0.96	2.0	1.0	0.20	0.09			0.30	0.17	0.16	0.06					
	綿布及同製品						1.4	0.72	0.84	1.5	0.30	1.6	0.86	0.92	0.42	0.45	0.26	0.16	0.06				
	其他布類及同製品						1.9	0.96	0.85	0.76	1.2	1.1	1.2					0.41	0.15				
	小計						5.3	1.7	3.1	4.1	1.5	2.9	2.1	0.92	0.42	0.75	0.44	0.75	0.27				
糸類及綿類	綿糸						1.2	0.57	0.68		0.35	1.3	0.58	1.3	0.60	1.58	0.91	0.42	0.15				
	麻糸			0.62	1.3																		
	麻苧	2.8	1.4	1.3	2.9																		
	繰綿								0.10	0.05	0.18	0.08											
	其他								0.10	0.05								0.37	0.13				
	小計	2.8	1.4	2.0	4.2			1.2	0.57	0.89	0.46	1.5	0.65	1.3	0.60	1.58	0.91	0.79	0.29				
金属及同製品	銅							0.72	0.39	0.47	0.25	0.82	0.36	0.37	0.17	0.13	0.08	0.14	0.05				
	鉄	1.3	0.68			0.68	0.43	1.2	0.57	0.73	0.38	0.77	0.34	0.46	0.21	0.59	0.34	0.16	0.06				
	金属製器具機械							0.38	0.19	0.31	0.16	1.0	0.44	0.53	0.24								
	其他	4.8	2.4							0.58	0.30												
	小計	6.1	3.1					2.3	1.1	2.1	1.1	2.6	1.1	1.4	0.62	0.72	0.42	0.31	0.11				
綿物及其原料	蠶糸							0.14	0.07	0.13	0.07	0.25	0.11										
	麦稈真田紐			0.52	0.26	0.45	0.17	1.4	0.72	0.51	0.25			0.22	0.10								
	麦稈							0.57	0.29	0.40	0.16	0.27	0.34	0.11	0.24	0.58	0.31						
	蓮、花蓮	0.09	0.10	2.1	1.0																		
	小計	0.09	0.10	2.6	1.3	0.45	0.17	1.4	0.72	1.1	0.91	0.29	1.9	0.34	0.36	0.58	0.22	0.41					
油類及燃料	石油	1.1	0.58	0.31	1.7	3.4	2.1	5.2	2.6	1.5	3.1	2.3	4.3	6.5	5.2	4.4	2.0	0.52	0.30	0.20	0.07		
	種油	0.39	0.80	0.60						0.06	0.13	1.8	0.31	0.22	0.27								
	石炭	1.1	0.40			0.63	0.39	0.19	0.10	0.75	0.73	0.74	0.10	0.77	0.39	0.77	0.34	2.3	1.31	0.36	0.13		
	木炭	2.7	1.4	2.8	4.0	1.05	0.65	0.28	0.14	3.4	1.3	0.59	0.26			0.70	0.40	0.36	0.13				
	其他	4.7	2.4							0.13	0.07												
	小計	0.39	10.4	5.3	3.1	8.4	5.8	5.1	3.1	5.7	2.9	2.5	6.5	4.6	4.7	8.0	6.2	5.1	2.3	2.3	3.5	2.0	0.91

		明治22年		28年		32年		37年		40年		42年		大正1年		6年		8年		
		移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	移出 移入	
肥	鯉、鯉粕羽鱗	0.41 1.1	0.75					0.28	0.14	0.15	0.08	0.44	0.19							
	種粕干粕	0.22 —	0.11							0.10	0.05	0.44	0.19							
	大豆粕							0.28	0.14	0.08	0.04	0.55	0.24							
	搾粕	0.92 1.7	1.3																	
	人造肥料										0.06	0.03								
	其他												0.11	0.05	0.35	0.16	0.93	0.53	0.40	0.15
小計		1.6 2.7	2.2					0.57	0.29	0.40	0.21	1.5	0.67	0.35	0.16	0.93	0.53	0.40	0.15	
其	和洋小間物							0.48	0.24			0.44	0.19							
	マッチ							0.19	0.10	0.10	0.05	0.41	0.18							
	煙草	— 8.1	1.1					0.48	0.24	0.12	0.06									
	和紙	—	0.72	0.42	1.3	—	1.6	0.55	0.28	0.40	0.21	0.44	0.19	0.22	0.10	0.54	0.31	0.07	0.04	
	洋紙	1.4		2.2		2.6		0.24	0.12	0.19	0.10	0.37	0.16	0.22	0.10			0.08	0.03	
	漆器	0.04	0.02					0.19	0.10	0.15	0.08	0.77	0.18	0.35	0.16	0.05	0.03	0.02	0.01	
	陶器	0.07	0.03					0.24	0.12	0.13	0.07	0.54	0.24			0.13	0.08	0.04	0.02	
	藍玉	0.40	0.20					0.04	0.02											
	薬種							0.14	0.07	0.10	0.05			0.11	0.05	0.13	0.08	0.02	0.01	
	苔	0.77 0.87	0.82																	
	籠	0.02 0.06	0.04																	
	雑	椎皮			1.1 4.2	2.7														
材木		48.5 44.3	46.4	39.0 39.3	39.2	— 23.6	14.6	42.8 38.6	40.7	35.7 17.2	26.1	37.4 47.5	41.8	29.4 81.0	52.9	55.3 88.3	74.4	82.8 91.1	85.8	
造船										17.0 —	8.1									
荒物						9.9	6.1													
石材																		0.02	0.01	
石炭		0.07 0.10	0.09					0.48	0.24				0.16	0.07	0.09	0.04	0.13	0.07	0.02	0.01
其他、雑品						6.9 9.9	8.7													
小計		49.3 49.3	49.3	40.5 45.8	43.2	6.9 45.9	31.1	42.8 41.7	42.2	52.7 28.8	40.3	37.4 50.6	43.2	29.4 52.0	53.4	55.3 89.3	74.7	82.8 91.1	86.2	
合計		100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	100.0 100.0	100.0	

註1) 第4表と同一書より作成。

2) 各年度とも左欄は上段は移出，下段は移入，右欄は移出入合計についてである。

めるといふ水産物のウェイトのたかさ等である。その他編物及其原料の小ささ、油類及燃料の大きさも指摘できよう。主要品目別にみると、其他雑品の中心は材木で、これのみで移出中の37.4%、移入中の47.5%を占め、これにつぐのが生魚で、移出中の19.9%、移入中の8.1%、米が移出の8.4%、移入の10.1%である。以上のほかでは石油が移出の4.3%、移入の6.5%、麦が移出の5.9%、移入の2.7%、塩干魚が移出の3.1%、移入の3.7%等がある。雑品中の材木、水産物中の生魚、普通農産物中の米が主要なものである。以上が明治42年の牛窓町の特徴である。そしてこの明治42年の特徴はこの期間を通じてのそれであることは、第6表の各年の構成からあきらかであろう。

ところで、以上のごとき部門別構成をとる物産県外移出入のある牛窓町の物産移出入地としての性格を検討したい。明治28年の統計は移出品を「土産ノモノ」と「輸入ニ係ルモノ」とに内わけしている。第7表はそれを示すものである。この年に移出額は384,478円であるが、「土産ノモノ」は123,430円、「輸入ニ係ルモノ」は265,048円である。後者、すなわち再移出は実に68.9%にも達している。この年の最大の移出品である材木はその額150,000円であるがすべて再移出品である（なお牛窓地方には木材の生産はない）。其他雑品につぐ移出のある普通農産物もその36.8%が再移出であるが、そのうちの個別品目としては材木につぐ米はその23.5%が、そして麦は76.7%が再移出である。水産物も実にその85.6%が再移出で、塩乾魚類は78.7%、生魚76.6%、食塩100%が再移出品である。移出の3.3%を占める飲食物はすべてが再移出であり、さらに油類及燃料、編物及其原料もすべて再移出である。移出品のすべてが「土産ノモノ」であるのは17品目中の5品目だけで、このほかすべて「輸入ニ係ルモノ」というのが7品目、大部分、あるいは一部分が「輸入ニ係ルモノ」が6品目であるというように、品目別にも再移出が多いのである。この時期の牛窓は物産流通の中継地であったといえるのである。

このように、明治28年にはこの牛窓町は物産流通の中継地的性格をもつことがあきらかとなったが、このように移出を「土産ノモノ」と「輸入ニ係ル

第7表 牛窓物産県外移出入部門別

(明治28年)

		移 出		移 入		移出入 合 計	構 成 比		
		数 量	価 額	数 量	価 額		移 出	移 入	移 入
普通 農 産 物	米	8,500石 ($\frac{2,000}{6,500}$)	77,350円 ($\frac{18,200}{59,150}$)	8,000	72,000円	149,350円	20.1%	19.0%	19.6%
	麦	4,300石 ($\frac{3,300}{1,000}$)	19,350 ($\frac{14,850}{4,500}$)	1,000	4,400	23,750	5.0	1.2	3.1
	雑穀	4,750石 ($\frac{2,350}{2,400}$)	25,020 ($\frac{11,770}{13,250}$)	2,800	14,935	39,955	6.5	3.9	5.2
	小計	—	121,720 ($\frac{44,820}{76,900}$)	—	91,335	213,055	31.7	24.1	27.9
水 産 物	生魚	—	23,500 ($\frac{18,000}{5,500}$)	—	15,000	38,500	6.1	4.0	5.0
	塩乾魚類	—	36,828 ($\frac{29,000}{7,828}$)	—	34,580	71,408	9.6	9.1	9.4
	食塩	9,000石 ($\frac{9,000}{0}$)	4,500 ($\frac{4,500}{0}$)	—	—	4,500	1.2	0	0.59
	小計	—	64,828 ($\frac{55,500}{13,328}$)	—	49,580	114,408	16.9	13.1	15.0
飲 食 物	砂糖	—	—	70,000斤	6,020	6,020	0	1.6	0.79
	醬油	200石 ($\frac{200}{0}$)	2,100 ($\frac{2,100}{0}$)	30	300	2,400	0.55	0.08	0.31
	酒	500石 ($\frac{500}{0}$)	10,500 ($\frac{10,500}{0}$)	50	1,200	11,700	2.7	0.32	1.5
	小計	—	12,600 ($\frac{12,600}{0}$)	—	7,520	20,120	3.3	2.0	2.6
糸 類	麻糸	600疋 ($\frac{0}{600}$)	2,400 ($\frac{0}{2,400}$)	2,000	7,800	10,200	0.62	2.1	1.3
	扱苧	3,000疋 ($\frac{0}{3,000}$)	5,160 ($\frac{0}{5,160}$)	10,000	17,000	22,160	1.3	4.5	2.9
	小計	—	7,560 ($\frac{0}{7,560}$)	—	24,800	32,360	2.0	6.5	4.2
油 類 及 燃 料	木炭	210,000疋 ($\frac{10,000}{200,000}$)	10,710 ($\frac{510}{10,200}$)	500,000	20,000	30,710	2.8	5.3	4.0
	石油	500両 ($\frac{0}{500}$)	1,210 ($\frac{0}{1,210}$)	5,000	12,000	13,210	0.31	3.2	1.7
	小計	—	11,920 ($\frac{510}{11,410}$)	—	32,000	43,920	3.1	8.4	5.8
編 物 及 原 料	花菱	1,000本 ($\frac{1,000}{0}$)	8,000 ($\frac{8,000}{0}$)	—	—	8,000	2.1	0	1.0
	麥科真田	5,000反 ($\frac{5,000}{0}$)	2,000 ($\frac{2,000}{0}$)	—	—	2,000	0.52	0	0.26
	小計	—	10,000 ($\frac{10,000}{0}$)	—	—	10,000	2.6	0	1.3
其 他 雑 品	紙	—	1,600 ($\frac{0}{1,600}$)	—	8,500	10,000	0.42	2.2	1.3
	材木	—	150,000 ($\frac{0}{150,000}$)	—	149,000	299,000	39.0	39.3	39.2
	椎皮	50,000疋 ($\frac{0}{50,000}$)	4,250 ($\frac{0}{4,250}$)	200,000	16,000	20,250	1.1	4.2	2.7
	小計	—	155,850 ($\frac{0}{155,850}$)	—	173,500	329,350	40.5	45.8	43.2
合 計	—	384,478 ($\frac{123,430}{265,048}$)	—	378,735	763,213	100.0	100.0	100.0	

註1) 『第18回岡山県農商工年報』より作成。

2) 移出欄の()内は、上段は「土産ノモノ」、下段は「輸入ノモノ」である。

モノ」とにわけて記載しているのはこの年以外には明治30年のみで、それ以後の年にはない。しかし移出・移入状況からもこの中継地としての性格をもつ牛窓のその後の推移を検討し得る。第6表によると明治40年の移出入品のうち、移入がなく移出のみというは麦稈真田、造船の2品目のみ、移出・移入がともにあるのは材木、米、麦、雑穀、生魚、塩干魚等18品目、移出がなく移入のみというは絹布及同製品、木炭、砂糖等28品目である。移出のみの造船、麦稈真田は明治28年の「土産モノ」であり、材木、米以下の移入もある移出品18品目は「土産モノ」と「輸入ニ係ルモノ」が移出されているであろう。移出がなく移入のみというものが最も多く、それは地域内で消費されるといってよい。再移出のあるのは移入品46品目中の18品目で4割ほどである。明治28年には移出入18品目中、移入のみで移出のないのは砂糖1品目、移入がなく移出のみは食塩、花菱、麦稈真田の3品目、そして移出・移入があるのは材木、米ほか14品目であって、移入品13品目のうちの9割以上ということになる。この明治28年と比較するとき、ここ近代の牛窓町における物産移出入の最盛期であったと思われるこの40年は、移出入品目はその数が増加していることにその隆盛が反映されているといえるとともに、中継地的性格はうすらいでいるといえるであろう。この明治40年をピークにして牛窓町の移出入額は減少していくなかで大正8年が異常な大きさを示すことをみてきたが、その最大のピークをなした大正8年について同様の検討を試みよう。この年の移出入品31品目中、移入がなく移出のみは野菜類、清酒、醤油の3品目のみ、移出・移入ともあるのは米、麦、果実、生魚、食塩、材木の6品目で、このほかの22品目は移入のみである。再移出が考えられるのはわずか6品目で、移入品目中の2割程度にすぎない。明治40年と比較して移出入品目数が大きく減少していること自体が、物産移出入地としての性格の変化を予想させるであろうが、ここにみた再移出品の減少はこの牛窓の中継地的性格が全体として大きくうすらいでいることを示しているといえるであろう。この間に、宇野線の開通をもって完成する近代交通網の形成にともな

う物産流通ルートが大きく変化しているのであるが、山陽鉄道の開通にともない海上輸送が大きく後退したとはいえなお移出入地として存続し、あるいはそれなりの発展さえみせてきた港湾のひとつである牛窓町は、ここにその地位を低下せしめ、また中継地としての性格を大きく失なっているのである。なお、このような推移のなかで全移出入額中の材木のその割合は明治42年に41.8%という大きさであったが、それは大正元年には52.9%、6年には74.4%といっそう増大し、8年には実に85.8%に達している。この年の材木は移入額3,610,000円、移出額は2,250,000円であって、大正8年という年の、前後を通じての最大の移出入額は実にこの材木の移出入によってもたらされていた。明治40年以後の移出入地としての地位が低下し、中継地的性格が失なわれていくなかで、ひとり材木の中継地として存続しているのである。

4 物産の流通と産業の動向

前節では牛窓の物産移出入地としての位置と性格を検討したが、ここでこの物産流通と当地方における産業の動向を概観しよう。

さて、『岡山県統計書』記載の二つの統計、物産県外移出入と商港出入荷によって牛窓の物産移出入地としての推移、その性格を検討してきたが、ここでこのような牛窓の物産流通をやや全体的に把握しておきたい。大正10年の牛窓町の1役場文書、『大正十年統計表』には物産移出入にかかわる二つの統計が記載されている。ひとつは〔第二十九表〕「輸出入(牛窓港)大正九年分」であり、もうひとつは〔第三十表〕「港湾出入貨物(牛窓港)大正九年分」である。後者は各品目について仕向地、仕出地ごとの単価、数量、金額を示すもので、仕向地、仕出地には県内の他市町村をも含んでいる。輸出額の合計は1,415,025円、移入額のそれは2,162,396円である。これは『県統計書』の商港移出入統計のそれと合致する。もうひとつの「輸出入」は部門別品目別に輸出、輸入ごとの数量、価額、重なる仕向地、仕出地を記すものであ

る。輸出額は合計1,092,545円、輸入額のそれは1,791,975円となっている。これは『県統計書』の物産県外移出入統計のそれと輸出額は一致し、輸入額はわずかに異なる数字である。『県統計書』のものは必要な修正を加えたものであって、この「輸出入」が『県統計書』の物産県外移出入統計にあたる。この役場文書の二つの統計の関連は個別の品目についてつきあわせてみることによって明確となる。「港湾出入貨物」によると米の輸出は6ヵ所になされ、その合計は4,400石、176,000円となる。岡山、日生、赤穂、淡路、塩津、兵庫へであるが、岡山、日生を合計すると500石、20,000円となり、県外分は差引3,900石、156,000円となる。この数字は「輸出入」の輸出の数量、価額に合致する。「港湾出入貨物」の米の輸入は同じく6ヵ所から1,530石、61,200円で、そのうち西大寺、福浜、周匝、三幡、岡山の県内5ヵ所で1,410石、56,400円で、県外の高松は120石、4,800円であるが、この県外の数字は「輸出入」のそれに合致する。すなわち、役場文書の「港湾出入貨物」は県内外の移出入、「輸出入」は県外の移出入を把握しているものであり、『県統計書』の「商港輸出入」は県内外移出入を記載するものである。したがって「商港輸出入」から物産県外移出入を差引いたものが県内移出入ということになる。

第8表は大正9年の牛窓の全物産移出入を部門別に示すものである。この年の牛窓の全物産移出入額は3,583,071円で、そのうち県外移出入は2,879,500円で80.4%、県内移出入は703,571円で19.6%である。全移出入で最大の部門は其他雑品でこれが67.5%を占めるが、そのうちの材木のみで65.6%を占める。そのほとんどが県外移出入である。先にみた材木の中継地という性格をここに明確にみることができよう。この其他雑品につぐのが普通農産物14.5%で、米、野菜、麦が主なものである。この部門は県内移出入のウェイトがややたかくなっている。これにつぐのが水産物で11.7%を占めるが、食塩、生魚が主なものである。以下、飲食物、油類及燃料がつづくが、前者は清酒などが主なもので全体として県内移出入のウェイトがたかく、後者は

第8表 牛窓物産県内外移出入状況

(大正9年)

	県内外移出入	県外移出入	県内移出入	県内外比率		部門別比率			
				県外	県内	県内外	県外	県内	
				移出入	移出入	移出入	移出入	移出入	
				%	%	%	%	%	
普通農産物	520,735 (423,325 97,400)	351,895 (325,370 26,525)	168,830 (97,955 70,875)	67.6	32.4	14.5	12.2	24.0	
水産物	418,800 (224,275 194,525)	215,875 (154,475 61,400)	202,925 (69,800 133,125)	51.5	48.5	11.7	7.5	28.8	
飲食物	118,550 (90,300 28,250)	164,900 (65,200 9,700)	43,650 (25,100 18,550)	63.2	36.8	3.3	5.7	6.2	
織物及同製品	20,525 (20,525)	17,900 (17,900)	2,625 (2,625)	87.2	12.8	0.57	0.62	0.37	
糸類及綿類	14,000 (14,000)	14,000 (14,000)	— (—)	100.0	—	0.39	0.49	—	
金属及同製品	9,100 (9,100)	9,100 (9,100)	— (—)	100.0	—	0.25	0.32	—	
油類及燃料	54,881 (54,881)	25,280 (25,280)	29,601 (29,601)	46.1	53.9	1.5	0.88	4.2	
肥料	9,500 (9,500)	9,500 (9,500)	— (—)	100.0	—	0.27	0.33	—	
其他雑品	2,416,990 (680,000 1,736,990)	2,161,050 (547,500 1,613,550)	255,940 (132,500 123,440)	89.4	10.6	67.5	75.0	36.4	
合計	3,583,071 (1,417,900 2,165,171)	2,879,500 (1,092,545 1,791,975)	703,571 (325,355 378,216)	80.4	19.6	100.0	100.0	100.0	
主要 個別 品目	米	237,200 (176,000 61,200)	160,800 (156,000 4,800)	76,400 (20,000 56,400)	67.8	32.2	6.6	3.7	10.9
	麦	98,900 (82,800 16,100)	18,400 (11,500 6,900)	80,500 (71,300 9,200)	18.6	81.4	2.8	0.64	11.4
	其他雑穀	17,850 (17,850)	11,550 (11,550)	6,300 (6,300)	64.7	35.3	0.50	0.40	0.90
	野菜	161,950 (160,650 1,250)	156,870 (156,870)	5,030 (3,780 1,250)	96.9	3.1	4.5	5.4	0.71
	生魚	161,250 (99,850 61,400)	108,250 (46,850 61,400)	53,000 (53,000)	67.1	32.9	4.5	3.8	7.5
	塩干魚	16,800 (16,800)	— (—)	16,800 (16,800)	—	100.0	0.47	—	2.4
	食塩	240,750 (107,625 133,125)	107,625 (107,625)	133,125 (133,125)	100.0	—	6.7	3.7	18.9
	清酒	75,700 (74,700 1,000)	61,200 (61,200)	14,500 (13,500 1,000)	80.8	19.2	2.1	2.1	2.1
	醤油	15,600 (15,600)	4,000 (4,000)	11,600 (11,600)	25.6	75.4	0.43	0.14	1.6
	砂糖	16,500 (16,500)	9,000 (9,000)	7,500 (7,500)	54.5	45.5	0.46	0.31	1.1
	石油	14,000 (14,000)	7,000 (7,000)	7,000 (7,000)	50.0	50.0	0.39	0.24	1.0
	種油	14,000 (14,000)	— (—)	14,000 (14,000)	—	100.0	0.39	—	2.0
材木	2,350,000 (680,000 1,670,000)	2,127,500 (547,500 1,580,000)	90,000 (90,000)	96.2	3.8	65.6	73.9	12.8	
其他雑品	50,900 (50,900)	31,300 (31,300)	19,600 (19,600)	61.5	38.5	1.4	1.1	2.8	

註

- 『大正10年統計表 牛窓町役場』より作成。
- 県内外移出入は「港湾出入貨物」、県外移出入は「輸出入」により、その差を県内移出入としてその額を出した。
- ()内は、上段は移出額、下段は移入額である。

それがいっそうたかい。以下、これら主要品目について仕向地、仕出地等をみていこう。

米についてはすでにみたので省略する。麦は赤穂（兵庫）、玉津、鹿忍（県内）より移入し、坂出（香川）、西大寺、笠岡、金浦、岡山（県内）に移出する。野菜は岡山よりの移入があり、岡山へのそれをうわまわる移出があるが、ほかに県外の神戸、大阪、兵庫、河内、高松へ移出する。生魚は県外の下関、高知、朝鮮から移入し、岡山、妹尾、宇野、西大寺という県内各地と神戸、兵庫、東京、播磨諸港へ移出がある。食塩は鹿忍、久々井、尻海（県内）から移入、移出先は岐阜、大阪、郡山、堺、小樽、浅草、高崎、新潟、長野というように県外広範囲にわたっている。清酒は日生（県内）からの移入があるが、移出先は土庄（小豆島）、兵庫等の県外、そして日生等の県内である。醤油は赤穂のほかは片上、日生、虫明といずれも県内近隣の地に移出している。砂糖は高松（県外）、岡山から移入している。石油、種油はすべて岡山からの移入である。さて最大の移出入品である材木であるが、これは第9表の

第9表 牛窓港材木移出入状況

(大正9年)

	移 入			移 出		
	数 量	金 額	仕 出 地	数 量	金 額	仕 向 地
県	2,000,000石	400,000円	宮崎	400,000石	100,000円	大阪
	1,500,000	300,000	油津（宮崎）	300,000	75,000	兵庫
	400,000	60,000	佐土原（宮崎）	1,000,000	200,000	播磨諸港
	3,500,000	700,000	八代（熊本）	200,000	30,000	淡路（兵庫）
	400,000	60,000	鶴崎（大分）	350,000	70,000	高松（香川）
	400,000	60,000	鹿児島、土佐、 阿波、石見、 讃岐諸港	150,000	22,500	支度（香川）
外				200,000	50,000	広島
	900,000	90,000	岡山	400,000	80,000	岡山
				250,000	37,500	西大寺
			100,000	15,000	下津井	
合計	9,100,000	1,670,000		3,350,000	680,000	

註 1) 『大正10年統計表 牛窓町役場』より作成。

ようになる。移入1,670,000円のうち5.3%にあたる90,000円が岡山からの移入のほかはすべて県外からで、それは九州の宮崎、熊本を中心とする九州各地から移入し、岡山、西大寺、下津井という県内各地へ19.5%の移出のほか播磨各港、兵庫、大阪、香川の各地という瀬戸内海沿岸各地に移出しているのである。材木の流通の中継地である牛窓の材木はこれらの地域を仕出地、仕向地としているのである。

ところで、戦前期を通じて工業の発展が相対的に微弱で、農業県にとどまった岡山県にあって、この邑久郡は工業の展開がさらに微弱な地方のひとつで、特に県南のそれとしてはそれが著しいところであった。⁽⁶⁾いまこの邑久郡の工場数・職工数の推移をみると第10表のごとくであり、大正4年までは2～5工場、7年になって9工場・197人、8年10工場、そしてそれまでの職工10人以上から職工5人以上へと工場調査がかわった大正9年でも13工場にすぎない。10年、11年には100を越える工場があるが1工場の職工数は5人にも満たないのであって、より零細なものまで把握されてこの程度であった。このような邑久郡にあって、この工場の町村別状況は同表に示すとおりであるが、牛窓町の工場数は、明治37年1、大正7年4である。大正10年の牛窓町役場文書には、工場票が収録されているが、それによると、9年12月31日現在、牛窓町には服部酒造場、牛窓鉄工所の2工場がある。前者は服部節二所有のもので安政元年創業、製品は清酒で750石、4万5千円、職工男工15歳以上11人、後者は岡義太郎所有のもので大正6年9月創業、船舶用石油発動機関製作で、石油発動機1基5馬力を使用、職工は男工15歳以上13人である。⁽⁷⁾牛窓は元来、和船建造がみられたが、この時期にいたるもその発展はない。

この牛窓町は元来「民間ノ生業ハ農家六歩ニシテ商業及漁業ヲ以テ相営」⁽⁸⁾

(6) 拙稿「戦前期岡山県における産業的地域編成」『岡山大学経済学会雑誌』第13巻第1号、1981年、所収。

(7) 『大正十年統計表 牛窓町役場』牛窓町役場所蔵。

(8) 『明治十七年十一月 勸業ニ関スル諸表及上申綴 第十二区牛窓村戸長役場』同前。

第10表 邑久郡工場町村別所在状況

	岡 山 県		邑 久 郡		邑 久 郡 町 村 別 工 場 数									
	工場数	職工数	工場数	職工数	大伯村	朝日村	鹿忍村	牛窓町	長浜村	玉津村	雲掛村	鶴見村	行幸村	本庄村
昭和35年	213	14,560人	4	92人	1		1				1		1	
36	173	13,015	4	233	1		1			1			1	
37	169	13,987	4	186	1		1	1					1	
38	160	15,862	3	107	1		1						1	
39	185	15,616	3	104	1							1	1	
40	183	15,666	2	38								1	1	
41	173	13,663	2	35								1	1	
42	161	18,458	5	89		1			1			1	1	
43	185	13,213	4	75		1			1			1	1	
44	218	15,233	5	74	1	1			1			1	1	
大正1年	228	18,025	5	98	1	1			1			1	1	
2	243	18,463	4	69	1	1						1	1	
3	274	17,997	3	299		1						1	1	
4	238	24,555	2	210								1	1	
5	275	26,218	2	28	(町村別不明)									
6	315	30,888	4	77	(町村別不明)									
7	329	32,544	9	197	1		1	4				1	1	1
8	370	31,808	10	154	(町村別不明)									
9	650	30,913	13	128	(町村別不明)									
10	1,847	33,752	105	366	(町村別不明)									
11	2,196	35,485	107	462	(町村別不明)									
12	1,076	37,196	25	330	(町村別不明)									
13	1,004	36,568	21	270	(町村別不明)									
14	1,022	37,196	21	277	(町村別不明)									
昭和1年	1,082	37,190	19	243	(町村別不明)									

註 1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

2) 大正8年までは職工10人以上、大正9年以後は職工5人以上を工場としている。

3) 大正5、6年および8年以降は「個別工場」欄はなく、したがって町村別はわからない。

むところである。農業が主業というが、海岸ぞいに平地がひらけているにすぎず、耕地面積も大きくない。明治26年という年であるが、耕地面積は水田53町2反2畝11歩、畑144町6畝16歩、合計197町2反8畝27歩、農家380戸の1戸あたりは5反1畝27歩と狭小である。⁽⁹⁾ 水稲(粳米) 反当収量は明治41~43年

(9) 『明治二十六年三月 材料統計表進達仕候也』同前。

平均で2石5斗8升7合であり、⁽¹⁰⁾ 全県ではたかい邑久郡全体が40～44年平均2石2斗6升9合であること⁽¹¹⁾を勘案すると、生産力はむしろたかいが、しかし狭小な耕地条件などで農業の基盤はよわい。工業の発展はみられず、いきおい漁業と物産移出入にかかわる諸営業によるであろう。前者は鰯魚を中心とする沿岸零細漁業にとどまる。そして後者の物産移出入地としての牛窓の地位は前節でみたような推移をたどってきていたのであった。

5 牛窓の盛衰

この牛窓には古くから要港があり、牛窓は名邑であった。古くは『万葉集』にも詠じられ、また江戸時代には朝鮮使節の寄港地に指定されていた⁽¹²⁾、などという明治以前にさかのぼらずとも、明治はじめのいくつかの資料がそのことを示している。明治13、14、15年という最も早い頃の『岡山県統計書』の「港湾」の項目をみると、明治13年には15港、14年には6港、15年にも同じく6港が記載されているが、いずれも牛窓港がそのひとつとしてあげられている。6港を記載する14、15年をみると、牛窓、下津井、日比、玉島、寄島、笠岡であり、牛窓は県下6要港のひとつである。港の深さ1丈、広袤東西15町15間、南北4町20間で、この規模等は他の諸港にまさるともおとらない港であることを示している。また明治14年、15年には燈台が記されているが、県下でもそれぞれ4、3のうちのひとつに牛窓のものがある。瀬戸北岸燈台、あるいは瀬戸燈台というが、明治13年1月15日設置、型質方型木造（石台）、高さ水面より3尺、発光は白色、射光の方位北42度、南62度まで、光達距離3里というもので、これまた県下有数の燈台である。牛窓港の定繫船は250

(10) 『明治四十二年分・明治四十三年分統計表 牛窓町役場』同前。

(11) (6)と同一論文、191ページ。

(12) 『岡山県大百科辞典』の「牛窓町」の項（上巻235ページ）。なお、『牛窓町の歴史と現状—岡山県牛窓町—』（地域研究第23集）、1982年、岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会、には近代以前、特に江戸時代についての叙述があり参考となる。

(明治13年), 252 (14, 15年)とあって, 13年, 15年は県下第1位, 14年は第2位である。明治13年の出入商船, 出入物貨についてはすでにみたところである。このような要港をもつ牛窓は県下の名邑となっている。明治13年には名邑19が記されているが, そのひとつに牛窓があげられている。街数17, 戸数767戸, 人口3,353人となっているが, この戸数, 人口は津山, 笠岡, 倉敷, 高梁につぐ, そして西大寺をうわまわる大きさである。ちなみに娼妓の数85人は下津井の95人につぐ数であり(岡山の西中島, 東中島でさえもそれぞれ48人, 5人である), 殷賑をきわめたことがこれからもいうことができる。

『県統計書』にこのように記載されている牛窓の状況を, 地元の文書類から概観してみよう。⁽¹³⁾まず, 「牛窓港及東港トモ天然ノ良港ニシテ西国筋ヨリ大阪地方へ行通咽喉ノ地ニシテ物貨輸出入ニ便」であって, その航路は「長州馬関ヨリ安芸備後ヲ経テ播磨路ヲ航行大阪ニ達ス」るもので「里程馬関へ百里, 大阪エ四十里」である。陸上輸送は「県道二等荷車人力車ノ通路西ハ本郡鹿忍村ヨリ来ル北ハ本郡長浜村ヨリ来ル本村ノ東端ニテ止ル」というもので, 人力車4輛, 荷車5輛である。そしてこの牛窓町に設置された牛窓郵便局の郵便区内は「土地ハ沃土ニシテ物産多く物貨運輸ハ海辺ニアルヲ以テ便アリ 民間ノ生業ハ農家六歩ニシテ商業及漁業ヲ以テ相當」む, と記されているのである。明治16年には牛窓銀行が設立されている。

さて, 主要商工業者を記載する『日本全国商工人名録』第2版は牛窓町の明治31年9月現在営業者として19人の商工業者を記している。この書にとりあげられている主要商工業地は岡山県は12ヵ市町村であり, 牛窓町がそのひとつとしてとりあげられていることそのことが, この牛窓町が有数の商工業地であることを示しているといえよう。この資料にもとづく牛窓町の位置づけ, 特徴についてはすでに検討を行なっているので⁽¹⁴⁾詳細はそこにゆずるこ

(13) (8)と同一文書。

(14) 拙稿「明治中期の岡山県における商品流通をめぐって」『岡山大学経済学会雑誌』第15巻第2号, 1983年, 所収。

ととして、ここではこの牛窓町は材木商のウェイトが特にその営業税額において圧倒的であること、それは営業税からみて岡山県下の最大の商人の存在によること、清酒等醸造のウェイトのたかいことをあげておくにとどめる。営業税による規模別にみえていくと最大は材木商若葉屋服部平兵衛（営業税148円66銭7厘）で、第2位は同じく材木商松屋岡義太郎（営業税69円83銭2厘）である。これにつづくのが清酒醸造兼醤油醸造金融貸付業梶屋服部平五郎（同54円88銭2厘）、清酒醸造兼荒物雑穀商竹内治助（同30円45銭2厘）、製塩清酒製造備中屋高祖鶴吉（同27円177銭）となる。このほかに、醤油醸造1、雑穀商2、生魚商2、荒物金物商1、芋楮卸売商1、乾物相物諸紙商1、履物商足袋製造1、薪炭木皮苔販売1と造船業1、廻船関係3である。造船業は大工屋宮脇重五郎、廻船業は廻船業船道具商庭瀬蕃蔵、穀物廻漕川崎屋森清太郎、汽船荷客取扱砂糖販売山本勝太郎である。海上輸送の要地であり、また特に材木の最大の中継地であった牛窓町の状況を示しているといえよう。なお服部平兵衛は所得税は228円10銭、服部平五郎は268円65銭という大きさであった。

さてここに出てきた梶屋服部平五郎、若葉屋服部平兵衛であるが、梶屋服部家は西服部、若葉屋服部家は東服部とよばれる、この地方屈指の大地主でもあった。⁽¹⁵⁾江戸時代後期には木材業・酒造業を営んでいた服部家は文政元年に木材業を分離して新家を創設したが、この木材業を営む新家が東服部で、酒造醸造業を営む本家が西服部である。西服部は醸造を中心としつつ、酒造業で得た利益を貸金にまわし、その過程で土地を取得していくが、特に明治10年代後半に急速に土地集積を行ない、地主としての基礎が確立する。大正元年に180町歩という西服部家としてのピークに達している。西服部の木材業

(15) 以下、西服部については『服部和一郎家所有文書目録—岡山県地主史料—』1977年、東京大学社会科学研究所、の「解説」（大石嘉一郎）、東服部については『服部完二家所有文書目録—岡山県地主資料・統一』1979年、同上、の「解説」（西田美昭）による。

を分離独立した東服部家はこの木材業を軸に貸金・土地所有へと事業を拡大し、同じく明治10年代以後に急速に土地を集積していき、最大133町（大正6年）の大地主となる。ともに貴族院多額納税者議員互選人となっている。両家とも有価証券投資を拡大し、関連会社の設立と出資、岡山市内の宅地購入、さらに西服部は朝鮮土地経営とその経営を多面化して発展していくが、耕地所有地主そのものとしては大正初期をピークとして縮小していつている。明治40年前後はこの地主としての両服部家の最盛期であろう。前節でみた物産移出入からみた牛窓町のピーク時は明治40年前後であったが、ときあたかも両服部家の地主としての最盛期なのであり、両服部の所在により、牛窓町は活況を呈していたであろう。

明治40年頃は、このように牛窓町が活況を呈していた時期であるが、しかしそれにもかかわらず新産業の展開もなく、国鉄宇野線の開通にともなう宇野を結節点とする近代交通網の形成にともなう物産集散地としての地位の凋落により、この牛窓町は停滞傾向をたどるといわざるを得ないであろう。この点について戸口統計により確認していこう。

牛窓町の1役場文書⁽¹⁶⁾は、この牛窓町の明治17年以後の本籍人口、戸数、そして明治32年以後の現住人口を記しているが、ここではこの牛窓町を他の町村と比較していくことから『岡山県統計書』にもとづくこととする。第11表はこの牛窓町を他のいくつかの町村との比較のうちに示すものである。現住人口は明治35年4,302人であったが、大正元年には4,583人、9年には4,610人となり、この間に増加している。また現住戸数も883戸から911戸、980戸へと増加している。明治35年を100として、現住人口は106.5、107.2、現住戸数は103.2、111.0であって、この間の増大はそれなりに大きい。これを邑久郡、あるいは純農村である邑久村と比較すると、それは著しいともいえる。そし

(16) 『明治十七年一月ヨリ同四十一年分マテ戸籍統計表』牛窓町役場所蔵、および(10)と同一文書。

第11表 戸口の趨勢

		岡山県	邑久郡	牛窓町	邑久村	児島郡	味野町	琴浦町	宇野町	
明治 35 年	現住人口	男	606,297	26,056	2,219	1,137	45,234	1,241	—	—
		女	575,355	23,399	2,083	992	41,475	1,140	—	—
		計	1,181,652	49,455	4,302	2,129	86,709	2,381	—	—
	本籍人口	男	609,818	27,296	2,169	1,229	45,827	935	—	—
		女	564,677	23,937	2,057	1,032	41,519	886	—	—
		計	1,174,495	51,233	4,226	2,261	87,346	1,821	—	—
現住戸数	234,074	10,731	883	425	18,051	425	—	—		
大正 1 年	現住人口	男	636,246	26,862	2,355	1,105	49,579	1,451	4,551	2,001
		女	613,602	24,732	2,228	1,012	46,763	1,341	4,300	1,838
		計	1,249,848	51,594	4,583	2,117	96,342	2,792	8,851	3,839
	本籍人口	男	662,566	28,838	2,377	1,255	50,249	1,083	4,286	2,005
		女	619,969	25,652	2,235	1,113	46,640	1,059	4,153	1,826
		計	1,282,525	54,490	4,612	2,368	96,889	2,142	8,439	3,831
現住戸数	243,147	10,380	911	422	19,685	683	1,895	800		
大正 9 年	現住人口	男	631,209	25,759	2,320	1,054	55,097	2,023	5,171	3,437
		女	633,744	24,536	2,290	999	53,872	2,732	5,073	3,062
		計	1,264,953	50,295	4,610	2,053	108,969	4,755	10,244	6,499
	本籍人口	男	698,034	30,233	2,556	1,264	53,930	1,307	4,979	2,330
		女	633,338	27,797	2,469	1,141	51,201	1,295	4,770	2,185
		計	1,361,372	58,030	5,025	2,405	105,131	2,602	9,749	4,515
現住戸数	251,132	10,056	980	445	23,546	904	2,073	1,889		
対本籍人口比率	明治35年	100.6	96.5	101.8	92.2	99.3	130.8	…	…	
	大正1年	97.5	94.7	99.4	89.4	99.4	130.3	104.9	100.2	
	大正9年	92.9	86.7	91.7	85.4	103.7	182.7	105.1	143.9	
指(明治35年数100)	現住人口	大正1年	105.8	104.3	106.5	99.4	111.1	117.3	…	…
		大正9年	107.0	101.7	107.2	96.4	125.7	199.7	…	…
	現住戸数	大正1年	103.9	96.7	103.2	99.3	109.1	160.7	…	…
		大正9年	107.3	93.7	111.0	104.7	130.4	212.7	…	…

註 1) 各年度の「岡山県統計書」より作成。

2) 琴浦町、宇野町の明治35年は、それにいたる旧町村合併が複雑で、同一地域のもの算出できない。

てそれは全県をうわまわるものでさえある。しかし、この岡山県において工業の発展が顕著にみられ、また物産移出入の拠点となった宇野をふくむ児島郡（ここでは同時に純農村部をもつ）と比較し、さらにそこでの工業の一拠点となった味野町と比較するとき⁽¹⁷⁾、牛窓町の増加はむしろ小さいといわざるを得ない。つぎにこの表における現住人口の本籍人口に対する比率をみよう。牛窓町は明治35年は101.8で、現住人口が本籍人口をうわまわっていたが、大正元年には99.4、8年には91.7と小さくなっている。それは邑久郡、あるいは邑久村より常に大きくはあるが、大正9年には全県よりも小さくなっている。比較のためにあげた児島郡のいくつかの町村のそれを見ると⁽¹⁸⁾、いずれも100を越え、牛窓町よりはるかに大きい。特に味野町は大正9年には182.7となっていること、大正元年には100.2であった宇野町が9年には143.9となっていることが目をひくであろう。これらの町では人口の流入傾向が明瞭にみられるのであるが、これに対して牛窓町は流入はとまり、流出にむかっているのである。

この人口の動きを現住人口の世生地別状況によって検討しよう。第12表はそれを示す。児島郡の味野町、琴浦町、宇野町がいずれも自市町村外生れが小さく、自市町村外生まれが大きいのに対して牛窓町は大正9年は男子のみが全県をやや小まるだけで、他はいずれも全県のうわまわるものとなっている。味野町、琴浦町、宇野町では外部からの人口の流入がここからも明瞭にみることができるが、牛窓ではそれがみられないといってよいのである。

いったん減少した物産県外移出入額も大正8年には未曾有のたかさとなっていた。9年にはこの牛窓町には株式会社牛窓銀行（普通銀行業）、東服部合資会社（材木販売・貸金）、服部合資会社（金銭貸付）、牛窓電気株式会社

(17) 児島地方については、拙稿「児島産業地域の形成」『研究報告書第16集』（岡山大学産業経営研究会）1982年、において検討しているので参照されたい。

(18) (17)と同一文書。

第12表 現住人口の自市町村外生れの比率

	大正9年		昭和5年					
	自市町村外生		男			女		
	男	女	自市町村生	県内他市町村生	他府県生	自市町村生	県内他市町村生	他府県生
岡山県	26.1%	44.5%	73.0%	18.5%	7.4%	55.2%	35.0%	9.3%
邑久郡	15.3	42.1	83.9	10.9	4.4	56.9	36.7	8.1
牛窓町	29.3	42.9	76.6	15.8	8.3	57.5	29.6	12.4
邑久村	17.4	46.3	79.7	17.1	2.9	50.1	45.2	4.6
児島郡	36.4	49.6	66.3	17.4	15.4	52.1	28.3	19.2
味野町	60.4	74.8	40.1	29.7	28.6	30.6	30.2	38.5
琴浦町	38.0	55.8	59.0	43.9	22.8	45.0	23.2	31.5
宇野町	66.1	66.2	43.8	24.6	29.9	41.9	28.7	28.6

註1) 両年度の『国勢調査報告 岡山県』より作成。

(電燈電力ノ供給及電気器具ノ販売貸付), 周永土地合資会社(土地ヲ所有シ其収益ヲ得ルヲ目的トス), 綾浦土地株式会社(海面埋立)の6会社⁽¹⁹⁾が所在している。なおも岡山県の海上輸送の一拠点であり, 備前東部の有数の都邑であった。しかし近代交通網の形成にともなう物産流通ルートの変容によって物産集産地としてのその地位は低落し, 新しき産業の展開もみられないまま, 停滞傾向をたどりつつあったのである。

(1983年8月15日)

(19) 『大正9年岡山県統計年報』による。